

# 市民による市民のための市民金融機関のチカラ お金の使い方と、使われ方

夢みたいな計画、と揶揄された「未来バンク」。

しかし既存の金融機関に預けると、意に沿わないところに、お金が回ってしまっ。自分たちのお金を自分たちでコントロールする場を作る」。その思いはどこから来て、どこに行くのか。

未来バンク事業組合理事長

## 田中 優

●たなか・ゆう 1957年東京都生まれ。天然住宅バンク理事長、非営利組織「ap bank」監事、日本国際ボランティアセンター理事なども務める。立教大学大学院、横浜市立大学、恵泉女学園大学非常勤講師。

無理に決まってる！

僕がNPOバンク「未来バンク事業組合」(以下、未来バンク)を設立したのは三十七歳のときですから、二十年前になります。

バンクと名はついていますが、いわゆる銀行ではありません。貸金業の登録を受け、「環境に優しい事業」

「福祉」「市民運動」の三つに限って融資を行なう、市民による市民のための市民金融機関です。融資を受けられるのは出資をした組合員だけというシステムになっていて、出資金は一口一円で一万口以上が加入条件になります。

始めた当初は、NPO仲間から「そんな夢みたくないこと、無理に決まってる」と冷ややかに受け取られ

たものです。出資金を拠出してもらっても、ATMで引き出せるわけでもないし、配当もゼロ、そんなものに出資する人などいるはずないじゃないかと(笑)。

でも、設立二十年を迎えた未来バンクは、二〇一四年三月末時点で、組合員数五百十三人、出資金は一億六千万円を超え、融資総額は約十億六千万円となりました。いま全国に

十四のNPOバンクがあります。もはやNPOバンクは、「夢」と揶揄される存在ではなく、立派な市民運動になったと思います。

初めから市民金融機関を作ろうとしていたわけではありません。もともとは原発への異議申し立てがあったのです。きっかけは一九八六年のチェルノブイリ原発爆発事故。事件の直後、生後三カ月の息子が喘息などで体調を崩し一週間入院したのですが、もしかしたら関係あるのではと関心を抱き、環境問題を考えるようになりました。

当時はチェルノブイリ事故の影響で、全国的に原発の市民運動が展開され、とくに八八年四月の「原発とめよう! 一万人行動」では、東京の日比谷公園に全国から約二百五十団体二万人の人が集まり、すご

い熱気でした。僕は東京都江戸川区の職員でしたが、江戸川区内で市民団体「グループKIKI」を設立し、これを軸にいろいろな問題に関わることになりました。

でも、原発への反対運動は一年も経つと全国的に失速しました。痛感したのは、「原発は危ない」と、単純に危機感を煽る運動は続かない、もっと日常的で、生活に密着した問題意識から出発した運動にしなければということです。

そこで開始したのが「リサイクル」、いわゆる資源回収です。当時はアルミ缶など一キロ百円以上で売れました。

ところがアルミはすぐに一キロ三十円まで暴落します。鉄など、一キロ一円で売っていたのが、逆にこちらが二十円払わないと引き取ってくれない逆有償が始まりました。

なぜなんだ? ——この疑問が未来バンク設立につながるのです。

## 貯金・預金の行き先への疑問

調べてわかったのは、リサイクル品の値段が落ちる背景には、同時に新品の値段が落ちているという事実がありました。つまり、安い新品のアルミが入ってくれば、リサイクル品は買い叩かれるしかない。

なぜ新品のアルミがどんどん入ってくるのか? 答えは意外でした。アルミはあちこちの途上国で作られているわけですが、工場を稼働させる電源のための発電用ダムは、日本のODA(政府開発援助)で造られていた。ブラジルのツクルイダム、インドネシアのアサハンダムなどです。しかもダム建設を受注するのは日本企業。そしてODAとはいっても、